

## 1. 抱犢固の伝説

桂未谷の著『札樸』巻九「郷里の旧聞」に“豹子崗”という一条がある。つまり孫美瑤のあの山砦を述べたものである。文に云う。

“蘭山県に高い山があり、俗に豹子崗と呼ぶ、つまり抱犢である。『通鑑』に‘淮北の民桓聶が魏の軍を抱犢固で破った’と。注に魏収の『志』を引く。‘蘭陵郡承県に抱犢山あり。’馥案ずるに、言い伝えではある人が犢を抱いてその頂まで登り、庵を結んで独り住んだ。犢が大きくなって、耕して食を給した。田があり泉があつて、人の世に何も求めなかつた。これも小さな桃源郷である。”

彼が引くのはいわゆる民間の語源解説（Folk Etymology）で、歴史地理の学術研究には何の価値もないが、伝説として見れば、なかなか面白く、そして民俗学にとって価値がある。我が郷土の射的山は明らかなその例である。いま記憶の及ぶ限りでまだ記録されていない地名伝説を一二書き留めて、みんながこうした材料を探す興味を起こすよう希望する。

紹興城内に一つの小路があり、わたしは行ったことはないから、それがどこにあるのか知らないが、ただ名前を躲婆弄〔婆さんを避けた小路〕と言うことは知っている。話では当時王羲之が六角扇を売る婆さんのために扇子に字を書いてやったが、婆さんは不機嫌で、なぜ扇子を汚してしまうのか、もう売れやしないと云った。王羲之はそこでかまわず安心して売りにゆけ、王某が書いたと言ひさえすれば、一本百銭で売れると云った。婆さんは彼の話した通り売ると、みんなは争って買い、一刻もせぬうちにみな売り切れた。婆さんはぼろ儲けをしたが、本当に意外であった、あくる日たくさんの扇子を持って王羲之のところに字を書いてもらいにきたが、今度は彼は困って、隠れて会わないでいるしかなかった。彼が隠れたのが一回きりなのか、それとも婆さんがくるたびに小路に逃げ込んだのかは分からないが、要するにこの小路が有名になり、以後“躲婆弄”と言われるようになった。

東郭門外三、四十里の所に、とても大きな川があり、名を賀家池と言ひ、特に Wuukcdzz と読む。この地名を付会してもたぶん賀知章と関係があるとしか言えないだろうが、民間には別に解説があつて、決してこの“賀”という字を重視しない。近隣の住民の話では、ここは本、ほかの村と同じように、一つの村だった。ある日、農民たちは脱穀して、稲掛けの稲束をすっかり扱いでしまったところ、地上に突出したものが見えた。まるで一本の太い筍のような、——しかし近隣には竹林がなく、決して筍ではあり得ない。愚かな農民たちは一体何物だろうと知ろうとして、掘り始めた。だがそれはほとんどもないことだった、あつという間に一つの村がまるまる見えなくなって、ただ広々と拡がる水ばかり、今日の賀家池ができたのである。この筍は龍の角であったのだ。田舎の人間が龍の頭の上で工事を始めたものだから、むろん龍どんはカンカンになって怒つたのである。今でも天気晴朗な時には、水底にまだかすかに屋根が見えるそうである。しかしわたしは花の時期や月の夕べにここを通つたこと十度を下らないが、黙って舷側に坐つても、水底の瓦屋根が見えないばかりか、船の下の人間の声も聞こえなかつた。ただ竹竿も底に届かぬ一面の碧の水が眼前に拡がっているばかりであつた。

こうした物語を、それは荒唐無稽だと言って、蹴りとばしても、かまわない。もし虚心に少し仔細に検討すれば、これらは決してそのように意味のないものではないことが分かるだろう。われわれは『世説新語』や『齊諧記』の根芽がほとんどそこにあるのを見るだろう。違うのは、ただ『世説新語』などは千年以来紙に書かれてきたのに対して、これらはまだ口と耳によって伝えられたことだけである。われわれは決して『続世説』を書こうというのではない。しかし一巻の民間の世説を記録することも、趣味と実益がない事ではないだろう。 民国十四年二月十六日夜中。

※初出：1925年3月2日『語絲』第16期